

東海地域の言語実態調査 (1)

第一次計画と 2018 年度調査結果

吉田健二 浅井麻椰 井上彩花 白井裕之 宇津宮大我 小川満梨奈
楠元梨子 桑原柚貴 河野真弓 鈴木絢子 坂野旭宏 有川可菜
岡田優希 佐波知幸 平井結衣 福澤彩果 安井佐織

1. 調査計画の背景

日本語方言の研究は、近年めざましい進展をみせている。あらたに全国規模の総合的調査の成果が公開され（大西拓一郎・編 2016）、『日本語地図』（国立国語研究所・編 1966~1974）や『方言文法全国地図』（国立国語研究所・編 1989~2006）の調査当時と現在の高年層の言語状況を対照することで、およそ半世紀間の言語変化をみわたせるようになった。このような成果にもとづき、「圏の分布」のようになかば通説であった言語変化・分布にかんする仮説が再検討されるうごきもある（大西 2016）。また言語地理学的研究の成果にくわえ、一般言語学などで発展してきた方法や理論も導入し、言語変化やその地理的伝播などにかんする一般化や理論づけをおこなおうとする研究もあらわれるなど、方法面での進展もめざましい（大西・編 2017 所収の論考など）。いっぽう、あいさつなどの言語行動や方言オノマトベなど、これまで中心的な研究対象とされてこなかった言語現象についても、質・量ともに充実したデータを基礎に、現象にたいする理解を深化させようとするところが積極的におこなわれている（小林隆・澤村美幸 2014、小林・編 2018 所収の諸編など）。

近畿方言圏はこのような成果がとくにまとまって蓄積されている。近畿圏だけで 801 地点の調査結果を報告する『近畿言語地図』（岸江信介・他 2017）をはじめ、はばひろい現象についておおくの言語地理学的研究がおこなわれ、その知見を総括した『関西弁事典』（真田信治・編 2017）により、地域の言語状況の全貌を概観できるにいたっている。

これとくらべると、東海の地域言語の研究はそこまでさかんでないようである。言語地理学的データの公表をふくむおおくの研究がおこなわれ（江端義夫

1998, 彦坂佳宣 1991, 鏡味明克 1962, 1965 など)、敬語形式、色彩語彙、アクセントなど、特定の言語現象が詳細に報告されてきたが、それから多少の年月をへている。近年、岐阜・愛知方言について山田敏弘氏が精力的に研究をすすめているが(山田敏弘 2001, 2007, 2008 など)、臨地調査によるデータ収集は主ではないようである。同氏の『岐阜県方言辞典』(山田 2017)は岐阜・愛知両県の地域方言集の膨大な記述を整理・地図化したもので、卓越した価値もつが、その資料の性質上ひと昔まえの伝統的方言を反映したものとなっており、マスメディアがすっかり浸透し、社会の流動性がたかくなり、地方在住者の共通語能力がたかくなったとみられる現在も、そこでみられるような伝統的方言形式・文法体系や、その地域差がどのていどたもたれているか、うかがい知ることができる資料はまだないと思われる。

全国調査の結果によって東海地域の言語状況のみることも可能だが、『日本言語地図』が東海三県全体で 158 地点(岐阜 61, 愛知 45, 三重 52)なのをたいして、『方言文法全国地図』が 54 地点(岐阜 22, 愛知 16, 三重 16)、『新・日本言語地図』が 40 地点(岐阜 17, 愛知 12, 三重 11)と地点数がへってきており、地域によっては、地理的分布の様相を知るには地点の密度がやや不足だともわれる。また、最新の『新・日本言語地図』でも調査時点で 70 歳以上の話者を原則としており、よりわかり世代における状況をうかがうことはできない。

愛知淑徳大学文学部国文学科「国語学演習」では、2014 年度以降、毎年、言語調査を実施し、その成果を報告してきた(吉田健二・他 2015, 2016, 2017, 2018)。昨年度までは各年の参加学生の提案(と卒業研究課題)にもとづき、毎年ことなる項目を調査してきた。継続して調査している項目もあり、多少の知見もえられているが、本年度からはそれもふまえ、上述の不足をおぎなうことを目標として、東海地域をカバーする調査を継続的におこなう。調査地域は岐阜県美濃地方・愛知県全県・三重県北中部とする。理由は、本学の所在地や学生の居住地からかんがえて現実的な範囲とすることと、(広域)名古屋都市圏を範囲とした言語事象の分布をとらえることに一定の意義があるとかんがえることによる。本稿ではその第一次計画を説明し、また 2018 年度に実施した 5 市町の調査結果を報告し、改善点をみいだしたい。

2. 調査概要

調査地には、昨年度までの調査地に隣接する、表1にあげる5市町、愛知県稲沢市、一宮市、岐阜県笠松町、岐南町および、三重県四日市市の日永地区のみなさんに調査へのご協力をいただいた。一宮市については、その北端の旧木曾川町を調査地とした。調査地点の密度をたかくするため、現在の市町村単位ではなく、平成の大合併以前の市町村を単位とした調査を目標としているためである。

表1 話者の一覧

	略称	生育地	男女	生年	外住歴など
1	岐南 50	岐阜県岐南町	男	1962	10歳まで岐阜市
2	岐南 40	岐阜県岐南町	男	1974	4歳から岐南町
3	岐南 30	岐阜県岐南町	男	1985	配偶者(神戸市)の影響を意識
4	岐南 20	岐阜県岐南町	男	1991	26歳から岐阜市在住
5	笠松 50	岐阜県笠松町	男	1962	
6	笠松 40	岐阜県笠松町	男	1977	19～23歳・石川県金沢市
7	笠松 30	岐阜県笠松町	男	1985	22～24歳・愛知県豊橋市
8	笠松 20	岐阜県笠松町	男	1989	23～27歳・名古屋市
9	木曾川 70	愛知県木曾川町	男	1942	
10	木曾川 60	愛知県木曾川町	女	1950	
11	一宮 50	愛知県一宮市	男	1964	
12	一宮 40	愛知県一宮市	女	1969	27歳から木曾川町
13	稲沢 70	愛知県稲沢市	男	1948	
14	稲沢 40	愛知県稲沢市	男	1973	19～23歳・京都市
15	稲沢 30	愛知県稲沢市	男	1981	
16	稲沢 20	愛知県稲沢市	女	1995	
17	日永 70	三重県四日市市日永地区	男	1944	18～70歳・名古屋市 / 岐阜市
18	日永 60	三重県四日市市日永地区	男	1949	
19	日永 50	三重県四日市市日永地区	女	1967	地域内移住あり
20	桜 20	三重県四日市市桜地区	女	1991	

調査には各市町の教育委員会・社会教育課・市民センターなどに話者の紹介・調査日程や場所の確保などのお世話をいただいた。各地域20, 30, 40, 50歳代(以

上) の1名ずつにたいする調査をおねがいの結果、60歳代、70歳代のかたもふくまれることとなった。以下では各話者を地域と年代をくみあわせた略称でよぶ。旧木曾川町の調査でお会いしたうち2名は旧一宮市内在住・生育だったので、一宮40、一宮50とよぶ。おなじく四日市日永市民センターでお会いしたうち1名は、そこから10Kmほど西の市内桜地区在住・生育だったので桜20とよぶ。地図やグロットグラム上でも区別する。

今回も依頼をした自治体等の職員が話者をつとめてくださったケースがおおく、木曾川70、木曾川60、稲沢70、日永70の4名をのぞく16名がこれにあたる。生育地以外の居住歴を表1にしめたが、以下の2名をのぞいて幼少期または成人以降の数年にかぎられており、それぞれの調査地のことばを代表するとみなす。

岐南50は10歳まで岐阜市だが、岐南町は岐阜市の南に接しひとつの都市圏を形成しており、岐南の話者たちもことばのちがいはないと意識しているようだった。本研究では、居住のながさと現在の居住地・職場を重視して岐南町のことばを代表した個人とみなす。日永70は成人期の大半を四日市をはなれてすごしており、たとえば『方言文法全国地図』の「その地域をはなれていた期間が10年以内」という基準をとおくみたさない。しかし、調査時の発話は近畿系方言アクセントのようであり、そのほかの回答も四日市のほかの話者の結果とおおきく矛盾しない。言語生育地をながくはなれたのち郷里にもどった個人が地元方言の能力を維持している（あるいは保持していた能力が再活性化された）ことをしめす例が報告されており（村中淑子2017）、日永70の個人語もこのような面をもつとおもわれる。留保つきながら、調査地である四日市日永地区を代表するとみなしてデータ整理をおこなう。

話者の年齢は2018年時点で23歳（稲沢20）から76歳（木曾川70）で、『新・日本語地図』の東海三県の話者の最低年齢（岐阜78歳、愛知73歳、三重76歳）ともほとんどオーバーラップしない。本稿の調査は、これら先行研究につづく世代の言語使用（変容）状況を報告するものということになる。調査は現地の会議室などで実施した。所要時間はお一人1時間以内。

3. 先行研究の略称

本稿でたびたび言及する先行研究について、以下の略称をもちいる。

『日本言語地図』	『LAJ』
『方言文法全国地図』	『GAJ』
「東海道グロットグラム調査」(井上史雄 1992)	『東海道』
『近畿言語地図』	『近畿』
『岐阜県方言辞典』	『岐阜県』
『新・日本言語地図』	『NLJ』

4. 調査項目

調査項目はおもにつぎの二点を考慮してえらんだ。

(1) 先行研究で東海地域に特徴的な形式の分布が報告されているもの

(2) 本グループの前年度までの調査で使用拡大傾向が顕著だとおもわれたもの

(1) は、たとえば「肉」の意味の「鶏」がこれにあたる。『NLJ』によれば、東日本各地に点在する「肉といえは鶏のこと」が愛知・岐阜にまとまって分布する。このような観点で『NLJ』から15項目、『岐阜県』から4項目、『近畿』から7項目、『東海道』から7項目をえらんだ。計33項目と先行研究よりかなりすくないが(『NLJ』は150項目、『近畿』は120項目)、調査時間をお一人1時間以内としたためこのていどが限界となる。これらについては、結果が対照可能となるよう、先行研究とおなじ質問文により調査をおこなった。

(2) は、たとえば(一段系)動詞否定形の「ヤン」で、関西中央部でも使用がひろがっていることの指摘はおおいが、使用が先行した三重でモーラ長がながい語や過去形でもつかわれるなど、一段系活用動詞への拡大(語彙拡散)傾向がうかがわれていた(吉田・他 2017:2016-220)。このことなどを検討するため「食べなかった」など、過去の調査から9項目をえらんだ。さらに、ことばと音声の印象評定、終助詞「し」「て」の使用、イントネーション、複合名詞、句のアクセント、言語意識項目をえらんだ。また、あらたに母音無声化(12項目)とガ行鼻音(14項目)の調査をくわえた。分量はかなりおおく、後述のように時間の関係で未調査になったケースもある。

(3) 調査項目

(3-1) 語彙

サトイモ、ヒガンバナ、「肉」の意味、とても（程度副詞）（以上、『NLJ』より）、ドロボーケズリ、ゴッキー、雨がバカ降った、オレンタチ、ジャカマシー、イクンダツケ（以上、『東海道』より）一人称、持ち上げて運ぶ、くすぐったい、丈夫い（以上『岐阜県』より）

(3-2) 文末詞

伝達の「だよ」の方言形、接続助詞「し」の終助詞的用法、

(3-3) 動詞・形容詞の派生形

起きない、来ない、しない、しないで、食べなかった、起きろ、しろ、行ってはいけない、行かなければならない、読めない（能力可能）、読めない（状況可能）散っている（継続相）、散っている（結果相）、起きよう

(3-4) 方言形の印象

文末形式シリン・シヤーの印象評定、音声の印象評定と地域の推定

(3-5) 韻律

イントネーション（主に疑問文）、複合名詞アクセント、名詞句連鎖のアクセント

(3-6) 音韻

ガ行鼻音、母音無声化

『東海道』の項目の再調査をおこなうのは、この研究により当時のあたらしい方言語彙に「東海地方の勢力」「中京地方の独自性」がみいだされたためである（井上 1992:59）。結果を参照し、中京地域でとくにつかわれていた語（オレンタチ、ドロボーケズリ）、関東にちかい使用パターンの語（ゴッキー、バカ降った、イクンダツケ）、関西にちかい使用パターンの語（ジャカマシー、シンカッタ）をえらんだ。この調査から30年以上を経ており、当時の「新しい方言」のその後の定着・衰退を検討することがねらいである。母音無声化については、愛知三河地方を「無声化の多い地方」とした福森貴弘・池田明大（2004:58）から8語をえらんだ。

5. 結果 (1) 語彙項目

以下、今年度の調査結果を報告する。1節でのべたとおり、東海地域をカバーする調査が目標であり、現在えられたデータはその一部のひじょうにせまい領域からにすぎない。本来、データが出そろってから報告すべきだが、ここでは一部の項目について、今回わかったことを報告し、今後の見とおしをのべる。

5.1 サトイモ / グロットグラムの構成

『NLJ』13 図「里芋」では、三重にハタイモ、タダイモ、コイモ、岐阜にジイモ、尾張にジイモ、アライモを報告する。『岐阜県』246 図も西濃～尾張にジイモ、東濃にタダイモを載せる。図1に今回の調査結果を整理したグロットグラムをしめす。

ここでグロットグラムの構成についてのべる。縦軸の年齢は生年によって算出した2018年時点の年齢(月日は考慮していない)。今回の調査地は、四日市をのぞき名鉄名古屋本線にそって南北にならぶ。駅名で代表させると南から「国府宮～名鉄一宮～新木曾川駅～笠松～岐南」となる。横軸はこれらの駅の直線距離を反映している。話者の住所や生育地はかならずしもこれと一致するわけではなく、概略の距離表示になる。三重の二地点は稲沢の南40Km 弱の位置にあり、そのまま図に反映させるとあきまがおおきくなりすぎるので、恣意的に若干の間隔をおいた。四日市日永地区と桜地区は、四日市あすなろう鉄道内部線南日永駅と近鉄湯の山線桜駅の直線距離を反映させた。相対的な距離のちがいをたもちつつ記号をおおきく表示するため、実際の距離(Km)の平方根で地点を表示した。図上部の凡例にしめた記号を各地点・各話者の年齢の位置にプロットするが、複数回答ははじめの回答を左に、つぎを右におく。「聞く」はグレーで表示して区別する。

さて図1をみると共通語の+サトイモが優勢だが、●ジイモも岐阜へと北上するほど、わかい世代でも優勢になる。愛知でも岐阜にちかい稲沢以北では、尾張のアライモではなく、高年層を中心にジイモがみられた。今回の調査地の話者については、上述の伝統的俚言形のうちジイモが勢力をたもっているらしいことがうかがえる。現段階では調査範囲がせまく地点数も足りないの、以上がどのていど当該地域全般の分布を反映しているか不明である。今後の調査

により、先行資料にあるほかの伝統的俚言形の残存～消長をみていくことになる。(吉田)

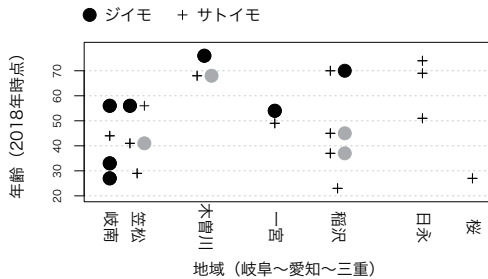


図1「里芋」のグロットグラム：「聞く」はグレー

5.2 ヒガンバナ

『NLJ』18図「彼岸花<その2>」には、三重にシタマガリ、岐阜にヘビノハナ、ユーレーバナ、シニバナ、尾張にキツネバナ、ハカバナ、ハッカケバナ、オイランバナなど多様な俚言形が報告されている。本調査では写真を提示して名称をたずねた。図2に結果をしめす。上記の俚言形のいくつかについておもに60歳代以上で「聞く」が得られるのみで、どの地域でも標準語形のヒガンバナが優勢だった。この花の形状、色、見かける場所などへの連想にもとづくさまざまな俚言形は、『NLJ』以降の世代で急速につかわれなくなっているとみられる。『NLJ』18図、岐阜・垂井のシニバナに似た◆シニンバナが地理的にややはなれた稲沢に、おなじく『NLJ』愛知・渥美の●ソウシキバナがやはりはなれた木曾川、稲沢にみられ、『NLJ』19図「彼岸花<語源意識>」の、「墓地にみられる(岐阜・垂井、揖斐川)」、「縁起が悪い(愛知・小牧)」という語源解釈の地理的広がり(西濃～尾張)がうかがわれる。『近畿』7図で滋賀県東部にシビト類がまとまって分布しており、これとも連続した地理的分布となっている可能性がかんがえられる。ほかの俚言形は、花卉の形状にもとづく▽ペロバナのみ。『NLJ』18図でおなじ発想にもとづくシタマガリが愛知・佐織町(現、愛西市)と三重の3地点にある。日永70は愛知での居住歴がながく(2節参照)、そこでこれを習得した可能性もあるが、シタマガリの勢力がつよい地元で習得した可能性がたかい。(安井)

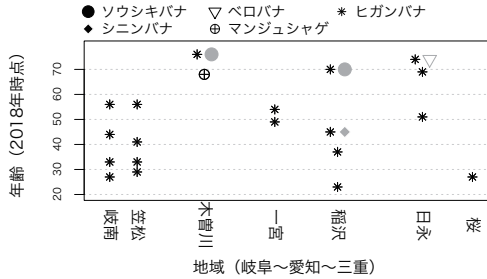


図2 ヒガンバナ

5.3 「肉」の意味

『NLJ』21 図「ニクの意味」では、東日本がおもに「豚肉」、西日本がおもに「牛肉」という東西対立が見られるが、東海地方には（琉球地方とならんで）「鶏肉」がまとまって分布する。『NLJ』とおなじ「このあたりで普通肉といたら、どの肉のことを言いますか」という質問文で調査した。結果を図3にしめす。今回の調査地では●「牛」が優勢である。『NLJ』の時点で愛知最西端の佐織町まで「牛肉」で、近畿の分布と連続するが、その後の世代で東日本よりは西日本がわの影響をつよく受け、「牛」の東進がすすんだとみられる。△「鶏」は愛知の60歳以上と桜20のみで、『NLJ』の状況が現在の60歳代あたりまでであることもうかがわれる。稲沢70から「こどものころはみな家で鶏を飼っており、それが唯一口にする「肉」だった」という情報がえられた。そのような生活からの変化と、この地域における「肉＝鶏」から「肉＝牛」への変化とが時期をおなじくしている可能性がかんがえられる。（福澤）

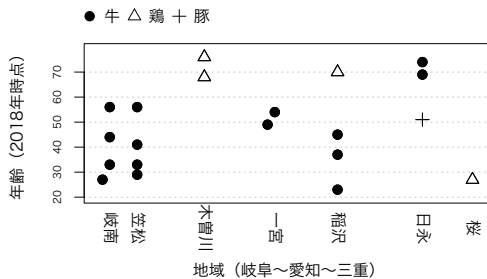


図3「ニク」の意味

5.4 とても (程度副詞)

この項目についても、『NLJ』56 図とおなじ「とても (面白い)」のいいかたをたずねた。結果は図4のとおり。『NLJ』で岐阜におおいドエライ、デーレーはなく、その短縮形□デレが回答された。また愛知の木曾川70と稲沢70からは、母音融合形■ドエリヤがえられた。このほかは、標準語形*トテモとならんで、●スゴイが優勢である。『NLJ』で小牧、佐織にス(ッ)ゲーがみられるのと整合する。また、▲メッチャが40歳代以下にみられる。『NLJ』の段階ではこの地域にはみられないもので、その後、近畿方言の威光をうけて受け入れられた結果と推測される。(平井)

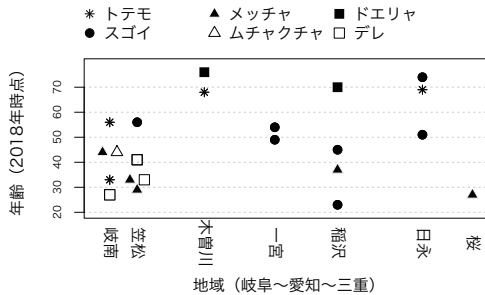


図4「とても」(程度副詞)

5.5 親さん

前年度からひきつづきの調査項目である。前回とおなじ「こどもの安全は親さんのほうでみてください」という調査文をもちいた。結果は図5のとおり。●「つかう」+「きく」ともに岐阜に集中し、愛知で散発的に「つかう」「きく」がある。岐阜・羽鳥、安八のみ「つかう」でほかは「きく」が散在するという昨年度調査の結果と似る(吉田・他2018:193)。「親さん」は現時点では岐阜に固有のいいかたで、ただし隣接する地域に若干伝播している、ということのようである。(河野)

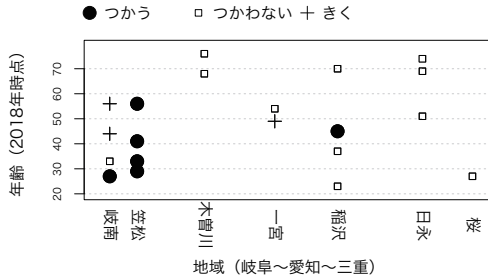


図5「親さん」の使用

5.6 文末詞「だよ」

これも昨年度につづく調査項目だが、今回は、助手席にいて信号がかわったことを運転者に「青だよ」とつたえるという場面設定でたずねており、前回の「そだよ」とはややことなる。結果は図6のとおり。

愛知では標準語とおなじ*ダヨが優勢で、岐阜では■ヤヨおよびその融合形□ヤオが優勢である。『NLJ』118図「先生だ」などで確認される、愛知がダ、岐阜がヤという断定辞の地理的分布を反映している。三重では△ヤニ、×ヤデが見られる。『LAJ』46図「いい天気だ」では岐阜でジャが優勢だが、本調査ではみられない。彦坂 (1991:3) は、東日本で安定するダ、西日本から侵攻するヤ、両者にはさまれるジャ、という勢力図から、ジャが衰退すると予測した。『NLJ』および今回の結果はそれがほぼ完了し、岐阜のジャが後退したあとは愛知のダではなく近畿のヤにおきかわる傾向があったことを示唆する。(浅井)

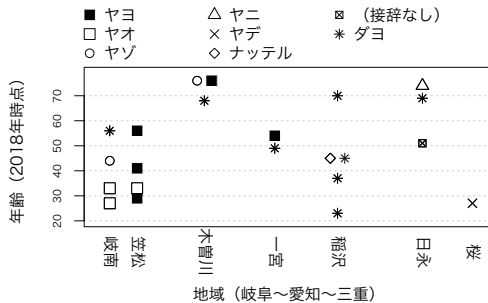


図6「青だよ」の「だよ」

5.7 持ち上げてはこぶ

机などを持ち上げてはこぶ意の「ツル」「ズル」は東海地方特有のいいかたとしていられている。ここでは『近畿』44 図とおなじ「少し重い長机を二人で持ち上げてはこぶ」という調査文をもちいた。結果は図7のとおり。時間の都合で木曾川・一宮のデータがかけているが、そのほかは今回の全域でツルだった。『岐阜県』457 図では愛知の南知多などにズルを載せるが、それらの地域とはなれた今回の調査地ではズルは皆無で、矛盾しない。調査時点（2010～2014年）で65歳以上の話者を原則とする『近畿』44 図でも三重全域でツルだが、今回のもっともわかり話者までツルで、依然よくつかわれていることがうかがわれる。あらかず動作が具体的・限定的で、共通語に一語でいいかえられる動詞がないことが、この語が維持される一要因だとおもわれる。（桑原）

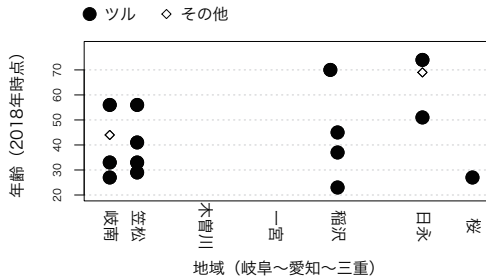


図7 持ち上げてはこぶ

6. 結果 (2) 文法項目

4 節でのべたとおり、計画には文法項目がおおくなった。理由は、動詞変格活用的一段化、ラ行五段化などの革新的変化が東海地域にも報告されていること、動詞の継続相と完了相の対立の維持なども一部地域で報告されていること、また三重で、近畿周辺で勢力を拡大しつつあるヤンによる否定形がみられることなど、文法現象に先行研究以降の状況を調査すべきとおもわれるもののおおいことである。『NLJ』『近畿』など最近の調査が文法項目におおくを割いていることも反映している。以下、結果を概観し、みいだされた傾向を整理する。

6.1 <匂いが>する：サ変動詞終止・連体形

サ変動詞「する」の終止・連体形がシル・セルとなる一段活用化の傾向は各

地にみられ、『GAJ』70 図では、岐阜の西濃・飛騨にシル（上一段）、飛騨・中濃にセル（下一段）、愛知全域にもセルが報告される。『岐阜』706 図も岐阜・愛知全域にセル、美濃・尾張にシルを載せる。今回の調査では「花の匂いを感じて「いい匂いがする」というとき」のいいかたをたずねた。結果は図8のとおり。愛知のセルはみられず、木曾川70のみ●シルで、共通語の*ニオイガシルが圧倒する。一宮50は⊕カザガシルと「匂い」の部分に伝統的方言形があるいいかたを「きく」とこたえたが、動詞部分はスルである。今回の地域・年代の範囲では、シルがほぼ勢力をうしなっているようである。（安井）

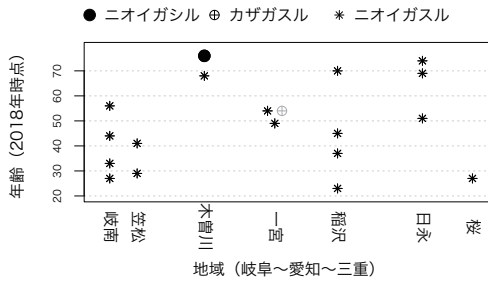


図8 においがする

6.2 しろ：サ変動詞命令形

『NLJ』77 図とおなじ「ぐずぐずしないで早くしろ」という調査文をもちいた。結果は図9のとおり。『NLJ』では岐阜でセヨに勢力があるが、稲沢30, 稲沢40, 日永60の3名から西日本的なセー、センカ（▽△）がえられたのをのぞいて、東日本的な+シロの類が優位である。『NLJ』で愛知県佐織町に△セーの回答があり、今回の調査地でもっともちかい稲沢にセーがみられるのと整合する。（井上）

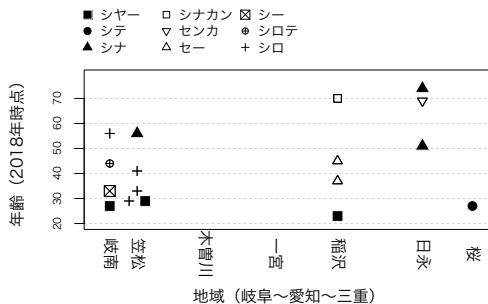


図9 しろ

6.3 起きろ：一段動詞命令形

『NLJ』76図とおなじ「ぐずぐずしないで早く起きろ」という調査文をもちいた。結果は図10のとおり。『GAJ』から『NLJ』で愛知で分布域が拡大したオキーはまったくみられず、これと拮抗する▽オキヨも日永70のみ。優勢なのは共通語的な+オキロで、『NLJ』以下の世代での変化の可能性がかんがえられる。上記の調査文にもかかわらず、■オキヤー、●オキテとやややさしい命令を答える傾向もあった。きつい命令をさける志向のあらわれとみることができるともかもしれない（井上）

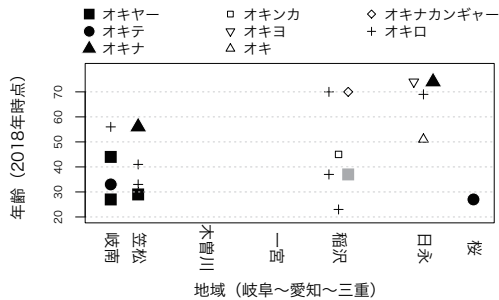


図10 起きろ

6.4 しない：サ変動詞否定形

上述のとおり文法項目をおおくりこんでいるが、とくに動詞否定形はおおくりした。三重のヤンによる否定がどの動詞のどの活用形に拡大しているかをしらべることが目的のひとつである。結果は図11のとおり。動詞「やる」の否定形を回答した話者もいるため分布がはっきりしないが、未然形がセではなくシという、上一段化傾向をしめす○シン、●シーヘンが岐阜・愛知にみられる。わかい世代でこの傾向が顕著なようで、興味ぶかい。いっぽう三重ではわかい世代中心にヤンがみられる。『GAJ』84図で東海地域全域でセンが優勢だったこととくらべると、あらたな地域差（シーヘン / シン / シヤン）が生じつつある、ということかもしれない。（岡田）

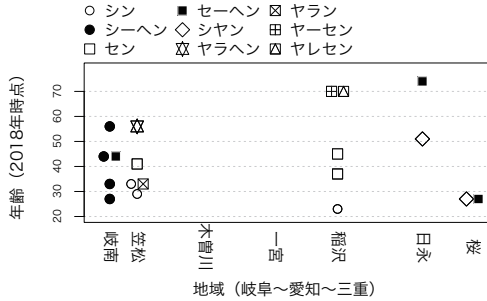


図 11 しない

6.5 見ない：一段動詞否定形

『近畿』68図とおなじ「食事中はテレビを見ない」という調査文で調べた。結果は図12のとおり。質問の意図に沿った回答ではない✕ミタラアカンをのぞくと、岐阜で●ミーヘンが優勢、稲沢は□ミン、三重が◇ミヤンという地域差がみられる。三重のヤンによる否定形は『GAJ』74図、太田(2016:68-70)、『近畿』68図など先行研究でもみられる。前項のシヤンとおなじく、若い世代でもヤンによる否定形が維持・拡大傾向であることがうかがわれる。(臼井)

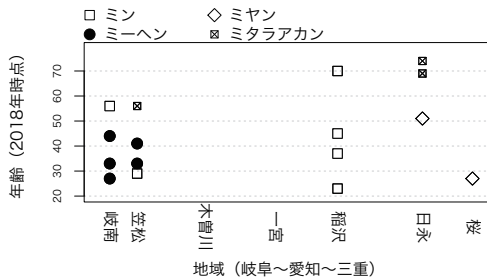


図 12 見ない

6.6 起きない：一段動詞否定形

『NLJ』69図とおなじ「8時になってもまだ起きない」という調査文で調査した。図13に結果をしめす。『GAJ』72図では尾張でオキン、オキセン、三重でオキヤンが優勢、『NLJ』69図では愛知、岐阜でオキンとオキヘン、オキ(ヤ)ヘン、オキーセン等が拮抗する。今回の結果からは、その状況はその後の世代

でもつづいているとみられる。いっぽう三重では、『NLJ』では北勢町（現いなべ市）と宮川町（現大台町）のみだった◇オキヤンがみられ、この動詞の否定形にも勢力を拡大しているもようである。（有川）

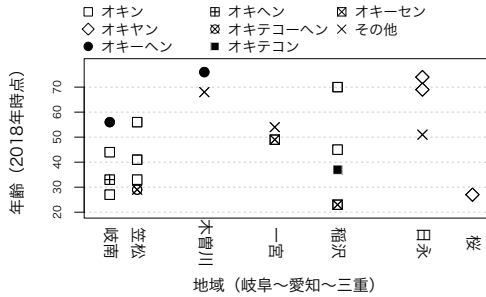


図 13 起きない

6.7 来ない：力変動詞否定形

『NLJ』70 図とおなじ「10 時になってもまだ来ない」という調査文をもちいた。『GAJ』83 図、『NLJ』70 図、『岐阜県』709 図で、岐阜・尾張・三重北中部に、コン、コーヘン、コーセン、ケーヘン、コヤヘン、コン、キヤヘンなどすこしずつことなるさまざまな語形がみられる。今回の結果は図 14 のとおり。動詞「ござる」の否定形をこたえた稲沢70をのぞくと、先行研究でも報告されるさまざまな方言形が若い世代までみられ、標準語形*コナイは岐南30のみ。いっぽう三重では、『GAJ』で一か所（名張）、『NLJ』では三重になく、『近畿』でもあまり目立たない◇コヤンが優勢で、先行研究よりわかい世代で、ヤンによる否定形がカ変にも拡大していることがうかがえる。（佐波）

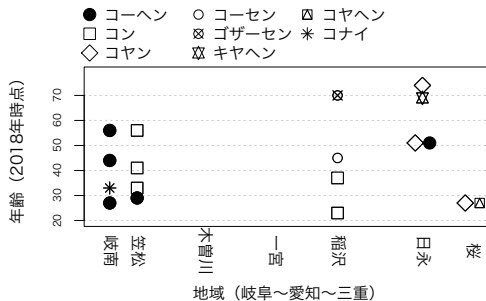


図 14 来ない

6.8 遊べない：動詞不可能形

親しい友人に「今日は遊べない」というときの「遊べない」をたずねた。結果は図 15 のとおり。ここまでの動詞否定形とおなじく、岐阜で●ヘンによる否定が優勢になる。三重ではやはりヤンがみられる。この項目では能力可能・状況可能のちがいを考慮に入れなかったが、『近畿』では能力・状況のいずれでも、四日市や周辺地域に他の形式とならんでヨメヤン、ミレヤン、ミレヤンダが得られている(60-64 図)。形態的にややながい動詞にもヤンが進出していることがうかがわれる。(楠元)

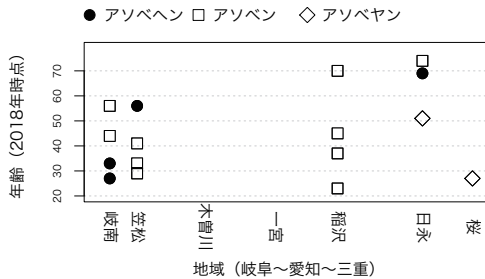


図 15 遊べない

6.9 来なかった：力変動詞否定形過去

『近畿』71 図とほぼおなじ、「今日は手紙が来なかった」という調査文をもちいた。結果は図 16 のとおり。伝統的な△コナヤンダは高年層のみで、共通語形コナカッタの影響をうけたとみられる□コナカッタが優勢である。また、上記 5 項目とくらべて、ヘンをふくむ●コーヘンカッタがすくない。『近畿』で鈴鹿周辺に 4 地点のみみられる◇コヤンダがみられ、おなじくヤンをふくむ◆コヤンカッタもあった。コヤンカッタは『近畿』になく、太田 (2013:72) でも南勢町 (現・南伊勢町) の 10-20 代 (2002 年調査) の 1 例のみ。従来ヤンが優勢だった三重南部・奈良・和歌山のヤンとは別の、あらたな勢力である可能性がたかい。(白井)

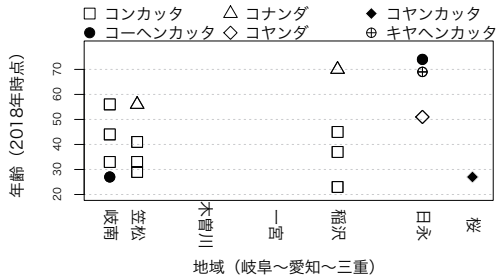


図 16 来なかった

6.10 食べなかった：一段動詞否定形過去

「今日は時間がなくて食べなかった」という質問文をもちいた。結果は図 17 のとおり。質問文が示唆する状況を反映して、「食べられなかった」にあたる、(否定)可能形の回答がおおい。伝統的な(ナ)ンダをふくむ、△タベナダと◇タベヤナダは50歳代以上にはかみられず、共通語形*タベ(レ)ナカッタ、およびその影響をうけたとおもわれる⊕タベレンカッタが優勢。ただしいずれも「タベラレ」ではなく「タベレ」となる革新的可能専用形(いわゆる「ラ抜き」)で、この形式の発達・拡大がはやいことがしられる東海地域方言の傾向を反映する。ヤンをふくむ形式については、吉田・他(2017:216-217)で、ながい動詞活用形で進出がみられる傾向を指摘したが、そこでの結果(p.218 表 10-3)とおなじく、三重の比較的わかい世代(日永50, 桜20)からはヤンをふくむ形式(◇)がえられた。(浅井)

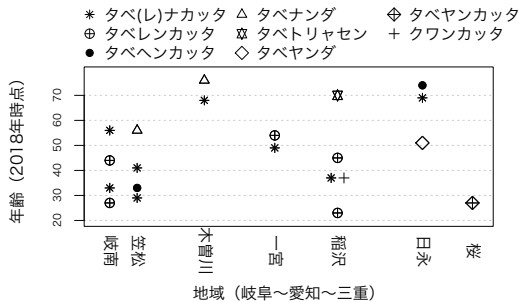


図 17 食べなかった

6.11 しないで：サ変動詞の禁止形

「ちょっと危ない遊びをしている子どもに「怪我しないでよ」という場面」の「しないでよ」の言い方をたずねた。6.4 節とおなじ、シンという一段活用的な接続形式がどのていどみられるかをしらべるねらいだが、こういったややおだやかな禁止の場面で、当該地域方言の傾向を反映した形式がえられやすいと予想し、別項目をたてた（実際に「怪我シンデヨ」という自発話話が観察された）。このねらいにもとづき、調査時には「シンデヨという言い方はしないか」と誘導質問もおこなった。結果は図 18 のとおり。○シンデ、田シントイテ、⊕シントキヤーの3つがシンという接続形式で、サ変的なセンは桜20の+セントツテヤのみ。6.4 節でもみたとおり『GAJ』84 図の「しないで」では、東海地域全域でセンが優勢だが、それ以降の世代ではシンが優勢になっているとみられる。吉田・他（2016:240）で三重は「シヤン」、愛知は「シン」が有力な形式という結果を報告したが、今回の結果とも整合する。（楠元）

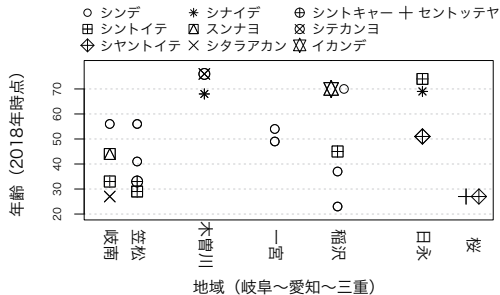


図 18 (怪我) しないで

6.12 読めない：能力（不）可能・状況（不）可能

『GAJ』『近畿』『NLJ』でも項目にたてられている、能力可能と状況可能の対立も調べた。いずれも不可能形について、能力は「この本は難しい漢字が多くて読むことができない」、状況は「ここは灯りが暗くて読むことができない」という調査文をもちいた。図 19、20 に示した結果をみると、ほとんどの話者で両用法の区別がない。図 19 の*「その他」は「ワカラ（へ）ン」で、最初の回答動詞「読む」の不可能形式としてことなるものあげたのは桜20（ヨマレヘン／ヨメヘン）だけである。『GAJ』182、183 図、FPJD の G-074、G-075（『NLJ』

への収録なし)、『近畿』60、61 図では東海地域や隣接する滋賀などで対立をしめす地域がおおいのにたいしてここでそれがみられない理由は、「ヨーヨマン」(東海全域)「ヨーヨメヤン」(『近畿』で三重に)などの「ヨー」が前接する形式が能力不可能にみられないことによる。先行研究以下の世代で「ヨー」をともなう形式が急速に衰退した可能性がかんがえられるが、もちいた質問文の「漢字が難しい本を読む」ことが当人の能力ではなく、読めるかどうかを規定する状況のようにうけとられ「ヨー」をふくまない形がえらばれた可能性もあり、調査文を再検討する必要がある。もうひとつのねらいは不可能形にもヤンの否定が拡大しているかどうかで、6.6～6.11 節とおなじく、日永50、桜20が両者にヤンをふくむ形式をこたえた。(宇津宮)

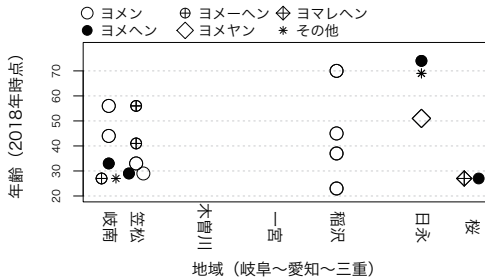


図 19 「読めない」(能力)

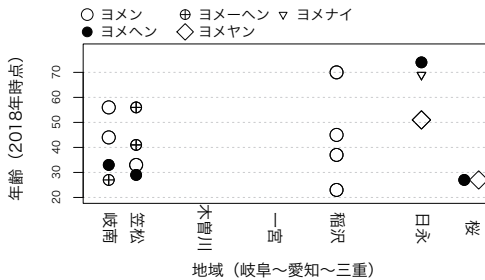


図 20 「読めない」(状況)

6.13 行かなければいけない：(五段) 動詞義務形

『NLJ』80 図とおなじ「明日役場に行かなければいけない」という質問文をもちいた。結果を前半部・後半部にわけて図 21・図 22 にしめす。前半部は■

イカナが優勢で、岐阜では○イカントもみられる。後半部は岐阜・三重では●アカンがおおいが、愛知では（母音脱落による？）短縮形⊕カンが優勢である。総合すると、岐阜・三重ではイカナアカンが、愛知ではイカナカンがおおいということになる。『GAJ』208 図や『NLJ』80 図では東海地域はイカナンランが最有力だが、今回の調査では日永70のみで、そのあとの世代でおおきく変化したことがうかがわれる。また、『GAJ』『NLJ』でみられるアカン、イカんにたいして、とくに愛知で母音脱落形カンが優勢なのは、それら先行研究と今回調査の話者の年代差（あとの世代でおきた短縮変化の結果）ともかんがえられるが、『岐阜』778 図には、岐阜の3地点に「～なかん」を載せており、さらに検討を要する。（坂野）

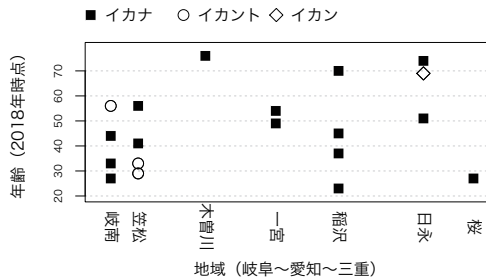


図 21 行かなければいけない：前半部

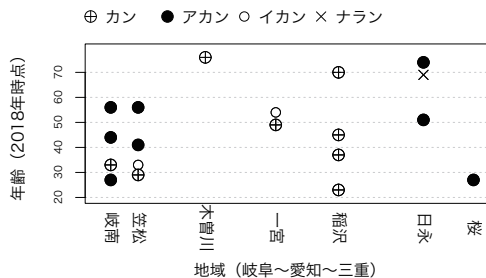


図 22 行かなければいけない：後半部

6.14 行ってはいけない：(五段) 動詞否定義務形

『NLJ』79 図とおなじ（ただし「孫」ではなく「子」にむかって）「あの池のそばに行ってはいけない」という質問文でしらべた。前項「行かなければいけ

ない」とおなじく、結果を前半部・後半部にわけて図 23・24 にしめす。前半部は、高年層に△イッテワ、▲イッテがおおく、『GAJ』225 図でみられる傾向に似る。よりわかい年代には■イッタラ、◇イッチャがおおい傾向があり、『NLJ』21 図と似る。後半部は前項とおなじく、岐阜・三重で●アカンが、愛知（と岐阜）で○イカンと短縮形⊕カンがおおい。前項では先行研究にはみられなかったカンが、『GAJ』では愛知・尾西、『NLJ』では岐阜、愛知・小牧、佐織、豊田、足助にみえる。母音脱落の変化がこちらの形式でよりはやかた可能性がかんがえられるが、図 22 と図 24 をくらべると、むしろ前項のほうが短縮形カンが優勢である。今後さらに調査をすすめ、あらためて検討する。（鈴木）

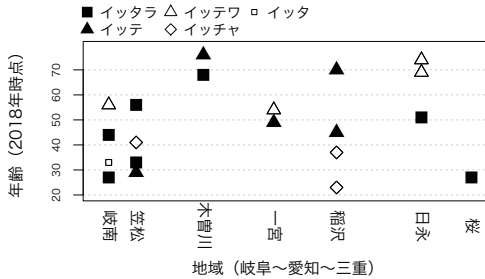


図 23 行ってはいけない：前半部

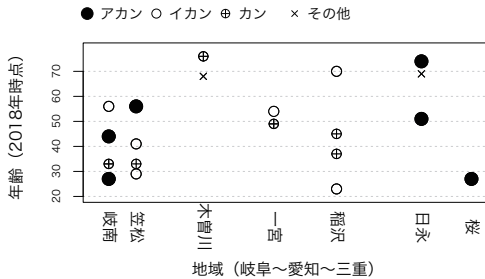


図 24 行ってはいけない：後半部

6.15 散っている：動詞継続相・結果相

『NLJ』105・106 図とおなじ質問文（絵は提示せず）をもちいて調査した。結果を図 25・26 にしめす。『GAJ』198・199 図によれば、愛知～岐阜西濃で [進行 / 継続] を [チツトル / チツテマツタ]、岐阜東濃で [チリョール / チツトル]

など、ことなる形態をもちいるとする地域がすくなくない。『NLJ』でも同様な区別がみられる。本調査でも、先行研究とおなじ、[チツトル/チツテマツタ]や、[チツトル/チツタ]で区別する話者がすくなくない。区別がないのは笠松20、笠松30、笠松40と稲沢20、稲沢40、日永60の6名で、いずれも[チツトル/チツトル]である。わかい年代でも区別しようとする話者がいるのは注目されるが、両方の質問を順に実施しているため、あえて区別しようとした結果である可能性もかんがえられる。次年度からはこの点の改善を検討し、アスペクト対立を維持しているかを精査したい。(小川)

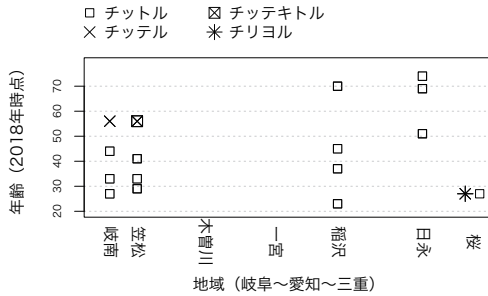


図 25 散っている：継続相

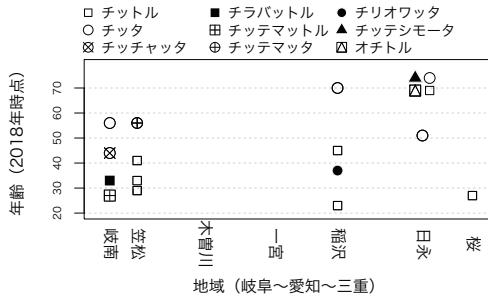


図 26 散っている：結果相

7. 結果 (3) 音声項目：母音の無声化

今回から音声項目の調査を開始した。本稿では母音無声化の結果を概観する。調査語は福森・池田 (2004) の結果と対照できるように、その調査語から (4) の 8 語をえらんだ。すべて 2 拍語で、第 1 拍・第 2 拍の母音とも無声化がおきる可能性がたかい「無声子音+母音イ・ウ+無声子音」という環境で、アクセシ

トや語音に関連した母音無声化のおこりやすさも検討できる。調査では調査語を「これは _____ と読みます」というフレーム文にいて視覚提示し、発音してもらった。

(4) 母音無声化の調査語: 基地、寄付、父、皮膚 (以上、1核型を予想)、菊、月、土、串 (以上、2核型を予想)

無声化は (語彙的なちがいを生じないという意味で) サブカテゴリカルな音声現象だが、聴覚印象と音声波形の視察によってすべてのケースで無声化「している」か「していない」かの二値に分類した。図 27 は岐南 20 の「父」の例。1 拍目には、子音の aspiration noise につづいて母音の存在をしめす周期波の区間がある。2 拍目にはそのような区間がなく、母音無声化「している」と判断した。図 28 は岐南 40 の「父」。子音の noise がめだち、母音をしめす周期波は非常によわく、低周波数領域に集中する。母音のきこえはわずかで、聴覚記述では母音無声化「している」と判断されることもありそうなケースだが、微弱ながら母音が聞こえることと、音声波形上のでがかりを根拠に、母音無声化「していない」と判断した。このような分類による 8 語 × 2 拍 = 16 ケースについて、話者ごとの無声化率の割合をプロットしたのが図 29 である (無声化データがえられたのは 15 人)。

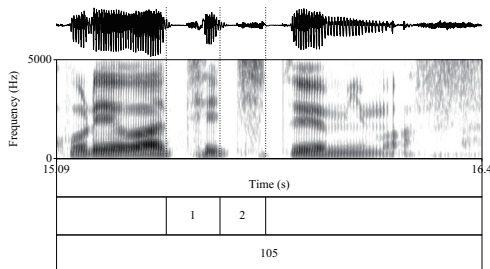


図 27 「これは父と読みます」(岐南 20)。上から音声波形、広帯域スペクトログラム。下は調査語(父)の 1 拍目・2 拍目区間の境界。

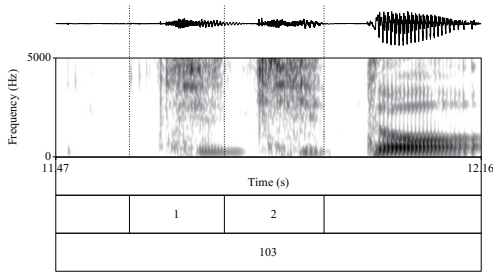


図 28 「これは父と読みます」(岐南40) .

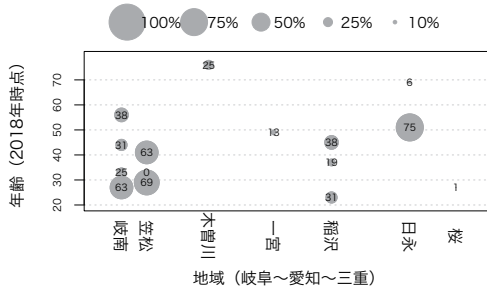


図 29 話者ごとの母音の無声化生起率(各8語2拍の16ケース内、単位は%)。無声化率をグレーの円●の大きさと数字でしめす。

個人差がおおきく、明確な傾向は指摘できないが、岐阜と愛知とを比べると、岐阜のほうがやや無声化率がたかい。無声化率は0～69%（16ケース中11ケース）で、福森・池田（2004）が報告する中部3地域（愛知県東部・静岡県西部・静岡県中部、p.56, 表15）とくらべてひくいようにみえる。福森・池田（2004:58）は上記3地域を「相対的に無声化の多い地方」としたが、今回の地域は「相対的に無声化のすくない地方」といえそうである。

子音の種類やその組み合わせなど、音韻環境による無声化生起の確率的変異については今後につまこととし、今回は話者ごとの結果とアクセント型との関係を整理する。なお、以下では「皮膚」の（低起）2核型、「月」の（高起）1核型など、アクセント型がことなるケースがすくなくなかった三重の3話者をの

ぞく、岐阜・愛知の12名について集計する。図30は調査語ごとの無声化生起率である。

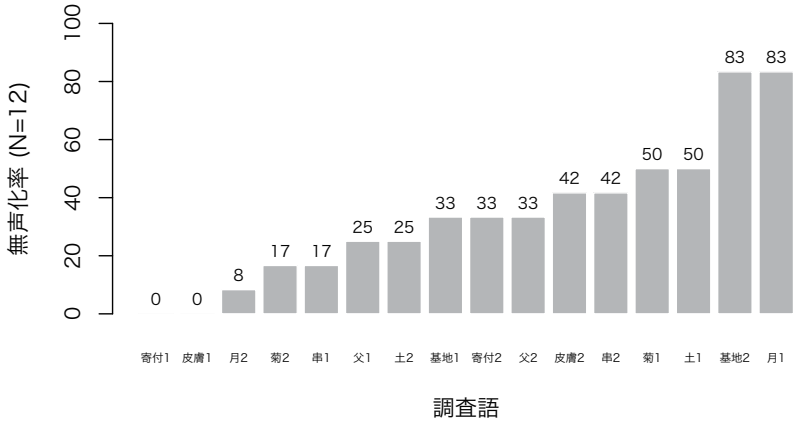


図30 語ごとの母音無声化生起率（岐阜・愛知の12人中、単位は%）.

まったく無声化がみられなかった「寄付1（1拍目）」「皮膚1」（0%）から、10/12人で無声化がみられた「基地2（2拍目）」「月1」（83%）まで、無声化生起率は語ごとにすこしずつことなる。しかしたとえば「基地」は全員が1核型で、したがってその2拍目はひくいピッチで発音される。「月」は全員が2核型で、1拍目はひくい。同様に「土」は全員2型、「皮膚」「父」は全員1型、「菊」は11/12人が0型または2型、「寄付」は10/12人が1型と、ピッチの低い拍の母音が無声化しやすい傾向がみられる。この点の検証のため、アクセント型と無声化の有無のクロス集計をおこなった。結果を図31に示す。

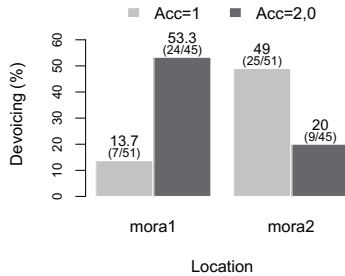


図31 アクセント型 × 拍ごとの母音無声化生起率（岐阜・愛知の12人中）。（ ）の数字は観察数、上の数字は無声化率（%）.

アクセント型は1拍目がたかい1核型 (Acc=1) と、2拍目がたかい2核型または無核 (0核) 型 (Acc=2) に二分した。() 内の分母がそれぞれのアクセント型の総ケース数。分子がそのうち母音無声化がみられたケース数で、無声化生起率をその上にしめた。Acc=1の1拍目 (mora1) と Acc=2.0の2拍目 (mora2)、つまりピッチがたかい拍で無声化率がひくく、これ以外のピッチがひくい拍では半数でいどが無声化する。アクセント型の効果の確認のため、アクセント型と無声化の有無の2×2のクロス表に χ^2 検定をおこなったが、有意な効果ありとかがえられる結果だった(1拍目: $\chi(1) = 15.4, p < 0.0001$; 2拍目: $\chi(1) = 7.8, p < 0.01$)。岐阜・愛知の話者についてはアクセント型に規定されたピッチの高低が無声化の有無につよい影響をあたえるらしいことが確認できた。この傾向は福森・池田(2004:48)の愛知東部・静岡西部、中部の話者にも1核型についてみられており、喉頭の制御とかかわる一般的な要因によるものとおもわれるが、2核型についても明瞭な効果がみられた点はことなる。他地域のデータを取得・分析してさらに検討する必要がある。

唯一、この傾向にしたがわないのが「申」、でアクセントは全員2核型だが、ピッチがひくい1拍目で2/12人、たかい2拍目で4/12人に母音無声化がみられた。語音の組み合わせなど、アクセント核以外の要因もはたらいっていることがうかがわれるが、この点もさらに調査をすすめた上で検討する。

8. 結果 (4) 韻律項目：疑問文イントネーション

昨年度から現在の東海地域若年層のイントネーションの記述を開始した(吉田・他2018:173-177)。そこでとりあげた愛知県津島市20代の話者(津島20)のものと類似したイントネーションパターンが観察された岐南20、笠松20の疑問文のイントネーションを、近畿系方言における(若年層の)イントネーションの典型とおもわれる桜20のものと比較する。

図32に、疑問詞疑問文「誰が | 長野 | 行くの?」の発話例をしめす(文節境界を縦線でしめす、以下おなじ)。左が笠松20で、昨年度調査の津島20とおなじく、発話初頭の疑問詞「誰が」が無核型で、東海方言の内輪式アクセントにみられる文節初頭からのピッチの「おそあがり」(吉田2017)のため、第二文

節「長野」のアクセント核のある1拍目までピッチがじょじょに上昇する。右が近畿系（おそらく中央式）アクセントの桜20の発話、こちらは「誰が」が高起無核型のため、発話初頭から「長野」の1拍目までたかいピッチが維持される。

「長野」のピッチ下降以降にも両者にちがいがあがる。笠松20では聴覚印象上、発話末のピッチ上昇がない。昨年度のものとおなじく、疑問詞によって疑問文であることが明示されていれば文末の上昇イントネーションが不要になる、木部（2010）の松本方言などの「相補タイプ」だとおもわれる。桜20の発話末には明瞭なピッチ上昇があり、疑問文マーカがあってもなくても上昇イントネーションが原則（必須）、というタイプとみられる。ここで報告した疑問文イントネーションの音調は犬飼（2006:80-84）が尾張地方の若年層について報告したものとも、ほぼおなじものだとおもわれる。

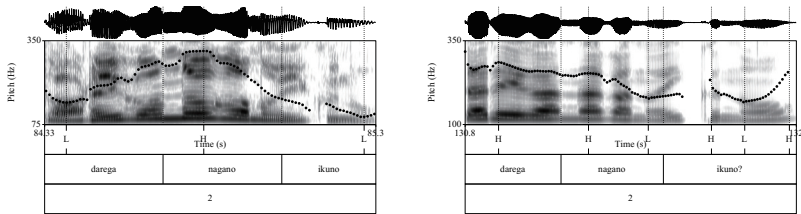


図 32 「誰が|長野|行くの」: 左 笠松 20, 右 桜 20. 上から音声波形、スペクトログラムと基本周波数. 下の注記はピッチの概略のうごきをしめす表示 (H, L), 文節境界, 文番号.

つぎに疑問詞が連続する「誰が|いつ|長野|いくの?」の例を図 33 にしめす。上段左の岐南20の発話では、図 32 の笠松20とおなじく、発話初頭から「長野」の1拍目あたりまでほぼ単調なピッチ上昇がつづき、ふたつの疑問詞句「誰が」と「いつ」が韻律的に一体化していることがうかがわれる。前年度の津島20(p.175 図 10 左)とおなじパターンである。いっぽう上段右の桜20では、「誰が」終端付近から「いつ」初頭にかけておおきなピッチ下降がみられ、ふたつの句の韻律的な独立性がつよい（2つめの韻律的領域の初頭をマークするピッチ下降・上昇の弱化がない）ことがうかがわれる。下段の笠松20では、全体のピッチ動態は岐南20に類似するが、「誰が」終端から「いつ」初頭にかけてちいさなピッ

ち下降があり、聴覚印象でも明瞭な下降・上昇がある。「長野」初頭のピッチ最高点（Hでマークした）が、岐南20では「誰が」からの上昇から予測されるていどまでたかくなるのにたいして、笠松20ではふたつの疑問詞句間のピッチ下降のため、ややひくめの値にとどまる。岐阜・愛知のイントネーション体系では、隣接するふたつの疑問詞句は「かならず一体化しなければいけない」わけではなく、「一体化しやすい」だけなのだとかんがえられる。

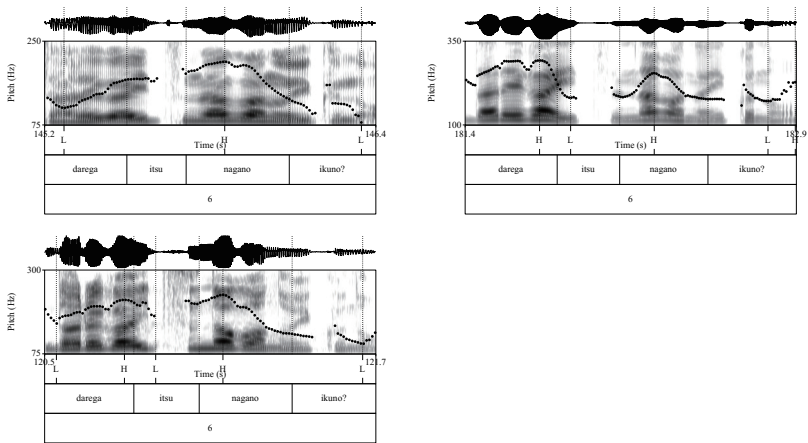


図 33 「誰が|いつ|長野行くの」：上段左 岐南20，上段右 桜20，下段 笠松20。

つぎに、Yes/No 疑問文の一例として「それ|大丈夫なん?」の例をみる（図 34）。このタイプの疑問文ではどちらも発話末の上昇イントネーションは必須らしく、笠松20の発話末にも明瞭なピッチ上昇がある。「大丈夫」のアクセント核の位置もおなじ（3 拍目）で、桜20の近畿系方言アクセントでこの語が低起式なため3 拍目以前のピッチ動態だけがことなる。

以上、3 種類の発話の比較から、岐阜（・愛知）と三重の（若年層の）疑問文イントネーションの表層のピッチ動態のちがいは、アクセントレベルのちがいが（今回の3 例については式音調の有無）によるものにくわえて、(i) 疑問マーカーがあるときに発話末の上昇イントネーションが必須か（三重で必須）、(ii) 連続する疑問詞句が韻律的に一体化しやすいか（岐阜で句の境界をしめすピッ

ち下降～上昇が弱化しやすい) というイントネーションパターンを構成する規則のちがいによってもたらされることが再確認された。今後さらにことなる文構造や連続する句の構成のちがいなどによるピッチ動態のちがいを検討する必要がある。

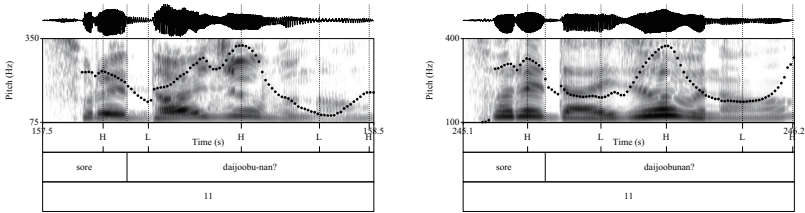


図 34 「それ|大丈夫なん?」: 左 笠松20, 右 桜20

9. まとめと課題

本稿は、本年度開始した東海地域言語調査の概要をのべ、一部の項目について2018年度調査の結果を報告した。ねらいの一つが、先行研究が報告する現在の70歳代以上の方言分布の状況以降の変化をみることだった。

報告した初年度調査結果にみられた顕著な傾向は、先行研究の状況とおおきくことなる項目がすくなくならずあったことである。「肉の意味」の「鶏」から「牛」への移行、「彼岸花」の俚言形が60歳代以下でほぼ知られていないこと、「里芋」のジイモ以外の俚言形の消長、動詞「する」の辞書形シルの消長、否定形のセンからシンの変化、「来なかった」「食べなかった」のナンダ類の消長、(能力) 可能のヨーをふくむ形式の消長がこれにあたる。1、2章でのべたとおり、最新の『新・日本言語地図』でも本稿の時点で70歳代以上の話者の状況をしめすものであり、東海地域の方言はその後の世代でかなりおおきかわったことがうかがえる。

また、そのような変化がみられた項目で、先行研究が(ほとんど) 記録していない、しかし共通語ともことなる語形がえられたケースがあった。「とても」のデレ、「行かなければいけない」のイカナカン、文末のヤオがこれにあたる。共通語化がすすんでいることがうかがわれた項目(「する」「しろ」「起きろ」など) がある一方で、旧来の地域特有の語形は後退したものの、それが共通語形

におきかえられてしまうのではなく、地域特有の語形の変化形が地域で勢力を維持し、つかわれつづけているケースもあるということである。地域特有の(机を)「つる」、「親さん」はわかい世代までつかう。東海地域の方言が共通語や西日本方言の影響をうけて変容しつつも、いっぽうでそれとは独立の内在的・自律的变化も経験し、一定の独自性もたもっていることをうらづける。三重におけるヤンの否定形の語彙拡散も、当域言語の自律的变化のひとつとみられる。愛知・岐阜のイントネーション実現規則も若年層に維持され、一部変容もみせる地域独自の特徴といえそうだ。現在の高年層よりわかい世代のことばにも全国一般的な傾向とはことなる独自性があることが示唆され、開始した方言調査計画に一定の意義があることが確認できたとかんがえる。

先行研究で中部独自の分布をしめしていた項目がより広域の有力な方言形に包含されるばあい、西日本に分布するものの影響をうけるケースがみられた。「肉の意味」の「牛」、断定辞のヤ、「とても」のメッチャがこれにあたる。東日本方言の影響力は共通語的な要素の全国規模の拡大については当然みられるものの、それ以外については地理的隣接や文化的影響の面で、西日本方言の影響のほうが(東海地域については)有力ということだとおもわれる。

以上は、今年度調査できたひじょうにせまい地域の20名の話者からえられたかぎられた情報からの推測にすぎない。本稿で報告した計画を遂行し、広域の情報を総合して、ここで整理した傾向の当否をひとつひとつ確認・検討していくことを、今後の目標とする。

謝辞 話者の紹介、日程調整、調査会場の利用などについて、以下の諸機関のみなさまにお世話をいただきました：岐南町中央公民館、笠松町教育委員会、一宮市木曾川市民センター、稲沢市生涯学習課、四日市市日永市民センター。また、岸江信介氏(徳島大学)、山田敏弘氏(岐阜大学)から文献のご提供をうけました。『新・日本語地図』については、「方言の形成過程解明のための全国方言分布調査」(FPJD)のデータを利用させていただき、大西拓一郎氏(国立国語研究所)からは話者データの提供もうけました。篤く御礼もうしあげます。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算による助成を受けています。

参考文献

- 犬飼隆 (2006) 「尾張方言疑問詞疑問文の音調」 音声文法研究会・編『文法と音声 V』
東京：くろしお出版 pp.77-92.
- 井上史雄 (1992) 「東海道沿線の方言分布パターン-グロットグラムデータの多変量解
析-」『言語研究』 101:35-63.
- 江端義夫 (1998) 「新しい敬語の補助動詞「～テミエル」が保守的な共通語と抗争する
方言戦略」『国語教育研究』 41:1-14.
- 大西拓一郎 (2016) 『ことばの地理学-方言はなぜそこにあるのか-』 東京：大修館書店
大西拓一郎・編 (2016) 『新・日本語地図-分布図で見渡す方言の世界-』 東京：朝
倉書店
- 大西拓一郎・編 (2017) 『空間と時間の中の方言-ことばの変化は方言地図にどうあら
われるか-』 東京：朝倉書店
- 鏡味明克 (1962) 「中部地方西部の語彙の構造」『都大論究』 2:67-90.
- 鏡味明克 (1965) 「地名のアクセント」『都大論究』 5.
- 岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美 (2017) 『近畿言語地図』 徳島：徳島大
学日本語学研究室
- 木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差-質問文のイントネーション」 小林隆・
篠崎晃一 編『方言の発見』 東京：ひつじ書房 pp.1-20.
- 国立国語研究所・編 (1966~1974) 『日本語地図 第1~6集』 東京：大蔵省印刷局
国立国語研究所・編 (1989~2006) 『方言文法全国地図』 第1~6集』 東京：財務省印刷局
国立国語研究所 (2018) 「全国方言分布調査 (FPJD) 調査結果・新日本語地図 (NLJ)
データ」 http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html
- 小林隆・編 (2018) 『感性の方言学』 東京：ひつじ書房
- 小林隆・澤村美幸 (2014) 『ものの言い方西東』 東京：岩波書店
- 真田信治・編 (2018) 『関西弁事典』 東京：ひつじ書房
- 彦坂佳宣 (1991) 「東海西部地方における尊敬語の分布と歴史-「あなたはどこに行く
のか」を例に-」『国語学』 166:22-33.
- 福森貴弘・池田明大 (2004) 「青年層における東海地方方言話者の母音の無声化」『言語
学論叢』 23:41-61.
- 村中淑子 (2017) 「南加賀出身のある」ターン移住者の方言維持の様相」『日本方言研
究会第105回研究発表会発表原稿集』 pp.25-32.
- 山田敏弘 (2001) 「岐阜県方言の終助詞について ~岐阜県方言文法体系記述への足がか
りとして~」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』 50 (1) :1-20.
- 山田敏弘 (2007) 「岐阜・愛知の若年層方言について 1 一遊びのことば・学校のことば・

- オノマトペー』『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』56(1):11-41.
- 山田敏弘(2008)「岐阜・愛知の若年層方言について2～文法的な形式と社会的関係を表す表現」『岐阜大学教育学部研究報告』56(2):1-21.
- 山田敏弘(2017)『岐阜県方言辞典』岐阜：岐阜大学
- 吉田健二・他(2015)「三重県北・中部方言の現状：予備調査報告」『愛知淑徳大学国語国文』38:124-150.
- 吉田健二・他(2016)「三重・愛知県境地域における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』39:218-250.
- 吉田健二・他(2017)「三重・愛知・岐阜県境地域の言語使用と言語意識」『愛知淑徳大学国語国文』40:207-242.
- 吉田健二・他(2018)「東海地域における方言使用と印象」『愛知淑徳大学国語国文』41:167-198.
- 吉田健二(2017)「東海地域西部方言のアクセントにおける「おそあがり」の音声実現の特徴」『第31回日本音声学会全国大会予稿集』pp.43-48.